



JAFCOF 釧路研究会
リサーチ・ペーパー vol.9

炭鉱閉山がもたらす子どもの生活と意識の変容 尺別炭砒閉山前後の中学生の作文・手紙を通して

新藤 慶 群馬大学教育学部
shindo@gunma-u.ac.jp

2016年4月30日

はじめに

炭鉱の閉山は、そこで働く労働者たちに多大な影響を与える。炭鉱閉山が労働者たちのその後のライフコースにいかなる影響を与えたかについては、常磐炭砒を対象に正岡寛司・藤見純子・嶋崎尚子・澤口恵一らがまとめた一連の研究が詳細に物語っている(正岡ほか編 1998-2007)。また、嶋崎や須藤直子による太平洋炭砒の離職者を対象とした研究からは、常磐の研究の蓄積のうえに「最後のヤマ」として採炭を続けた太平洋炭砒の状況から見えてくる新たな知見が加えられている(嶋崎・須藤 2013; 須藤 2012, 2015)。

しかし、閉山によって影響を被るのは、労働者自身だけではない。当然のことながら炭鉱労働者の家族にも、多くの影響が及ぶことになる。そうであるがゆえに、たとえば炭鉱の主婦たちは「主婦会」や「炭婦協」を組織し、炭鉱のあり方をめぐる闘いに従事した。そのことは、西城戸誠・大國充彦・井上博登・久保ともえの研究が詳らかにしている(西城戸ほか 2015)。

さらに子どもたちに焦点をあてた研究も少なくない。1950～60年代の、主に中小の炭鉱が閉山に追い込まれた時期には、その動きがもっとも激しかった福岡・筑豊地域を中心に、子どもたちの生活や学力・体力などから、炭鉱閉山が子どもたちにもたらす影響をさぐる研究が積み重ねられた(その概要については、新藤(2015)を参照)。一方で、子どもたちの作文をまとめるなかから、炭鉱閉山に対して子どもたちが感じている意識を明らかにする仕事もみられる。

このうち、「炭鉱の子どもの作文」編集委員会(1986)は、閉山が迫っている炭鉱の労働者家庭に育つ子どもたちが、炭鉱閉山への疑問や率直な思いなどをつづる様子をまとめている。また、芝編(1968)は、必ずしも閉山にのみ焦点をあてたわけではないが、当時の産炭地の小学生から高校生までの作文をまとめており、このなかでは、閉山によって労働者が職とともに生きがいや誇りも失う様子、それに伴って妻が就労に出ることで心身を疲弊させる様子、さらにそのことが子どもの家庭生活や学校生活の不安定さをもたらす様子などが詳細に描かれている。

そのようななか、本稿で検討するのは、1970年2月に閉山した雄別炭砒株式会社尺別炭砒の労働者の子どもたちが主に通っていた音別町立尺別炭砒中学校(以下「尺中」と略記)の閉山前後に在籍していた生徒たちの作文や手紙である。これは、尺中最後の教頭を務めていた松実寛氏が保存していたものである。松実氏の視点から見た尺中閉校前後の状況、さらに尺別地域の盛衰の要点については、嶋崎・笠原(2016)にまとめられている通りである。

この尺中の生徒たちの作文・手紙には、子どもたちの作文をまとめた先行の業績に加えて、以下の2点の重要性がある。第1に、閉山直後の1970年3月に在籍していた1～3年生と、その後同年4月に入学した新1年生の4年分の作文・手紙があることである。以下で紹介するように、中学生にとっては、卒業後の進路選択が、その後のライフコースを決めていくうえでも重要な分岐点となる。その進路選択が目前に迫った3年生なのか、若干先になるその他の学年なのかによって、閉山の受け止め方には差異が生じる。いずれにも、それぞれの立場なりの苦悩や不安が存在している。その点を明らかにしうるといふ利点がある。

また第 2 に、閉山決定直後から、閉山後の転居先での状況や意識まで、時系列の変化をたどることができる。これまで「作文」と称して来たものは尺中在籍時に書かれたものであるが、「手紙」とは、閉山後の転居によって、転居先から尺中の元生徒たちが、松実氏に転居先での状況を書き送って来たものである。その点で、「これから訪れる閉山への不安」から、実際に閉山を経験した後の状況までをたどることができる。この点も、以下の部分で紹介したい。

以下では、当時の子どもたちの感じていることをなるべくそのまま伝えられるよう、多くの引用を行う。これらを通して、閉山がもたらした子どもたちの生活と意識の変容をみていきたい。

1. 資料の概要

本稿で分析対象とする資料は、作文ファイル 9 種類と手紙ファイル 1 種類の合計 10 種類からなる。それぞれ封筒にわけて整理されていた。これらをスキャンし、便宜的に「作文ファイル」1～9 と「手紙ファイル」と名称を付した。

作文ファイル 1～3 は、尺別炭砒閉山決定直後の 1970 年 3 月に、その月に卒業を迎える 3 年生(尺中 23 期生)によって書かれたものである。作文ファイル 1 は 3 年 A 組の 36 名、作文ファイル 2 は 3 年 C 組の 34 名、作文ファイル 3 は 3 年 B 組の 33 名の作文が収められている。

作文ファイル 4 と 6 は、1970 年 3 月に当時の 2 年生(2 年 A 組・2 年 C 組に在籍の生徒、尺中 24 期生)によって書かれたものである。作文ファイル 4 は 2 年 A 組の 35 名、作文ファイル 6 は 2 年 C 組の 34 名の作文からなっている。

作文ファイル 5 は、学年・氏名の記載はほとんどない(一部 3 年生との記載がある)が、内容から 1970 年 4 月以降にまとめられたものと推測される。12 名分の作文が収められている。

作文ファイル 7 は、1970 年 3 月に当時の 1 年生(1 年 B 組の生徒、尺中 25 期生)によって書かれたものである。15 名の作文からなっている。

作文ファイル 8 は、尺中の閉校を 2 週間後に控えた 1970 年 7 月に当時の 3 年生(尺中 24 期生)3 名によって書かれたものである。

作文ファイル 9 は、執筆時期は不明だが、1970 年度の尺中最後の修学旅行を題材にまとめられた 1 名の生徒の作文である。

手紙ファイルは、尺中の卒業後、もしくは転校後に書かれたものだが、内容から察するに、ほとんどが 1970 年度内にまとめられたものと考えられる。手紙自体は 36 名から送られている。

執筆者については、名前が確認できたのは全部で 201 名であった。このうち、作文と手紙の双方を執筆していることが確認できたのは 25 名である。手紙は、もっとも多いもので 1 人で 5 通したためられている。

なお、これらの作文・手紙とも、残念ながら全編が保管されていたわけではない。これらの作文・手紙を執筆した学年のうち、閉山時の 3 年生である 23 期生の人数を同窓会名簿(記念誌編集委員会編 2000)から数え上げると全部で 131 名となっており、作文・手紙のすべてが残されているわけではないことがわかる(そもそも、欠席等の事情で、すべての生徒が作文を執筆していない可能性もある)。

また、尺中の閉校記念誌にはのべ21名分(うち3名分は「3年女子」などと指名の記載がない)の作文と6名からの手紙が掲載されている(尺別炭砦中学校 1970: 13-28)。このうち、作文については氏名が記載されている7名分と、氏名の記載がない3名分については、上記作文ファイルに収載されている。一方、氏名の記載があるうちの残り11名分については、ここで整理する作文ファイルには収載されていない。手紙については、今回の手紙ファイルに収められているものと収められていないものが3名分ずつであった。ここから、ここで対象とする作文・手紙が、全体を網羅したものではないことが把握できる。

そのため、全体でどれほどであったかの総量も不明である。ただし、作文や手紙が失われたとすれば、それは松実氏の転居等に伴って散逸したものと考えられ、作文・手紙の廃棄や保管については、基準があつて意図的に行われたというわけではない。

これらの作文と手紙を、PDF形式でスキャンした後、テキストデータとして入力を行った。

2. 閉山決定直後の3年生の作文

2.1 先行きへの不安

それでは、以下、具体的な作文・手紙をもとに、尺別炭砦の閉山が当時の中学生にもたらした影響を、中学生の視点から捉えていきたい。はじめに、閉山決定直後に書かれた3年生の作文をみたい。

ここから最初に見出されるのは、先行きへの不安である。

私の家も、まだどこ^(ママ)えいくのか^(ママ)わはつきりきまっていない。あそこ^(ママ)えいく、だの、いやこっこのほうにいくなどと、おちつかない^(ママ)前日^(ママ)がつづいている。私の未来にはなにがまっているのだろう。高校にいくことか、それとも仕事につくことそれとも、色々な、学校にいくこと、私の目の前はまっ暗だ。(作文ファイル1(以下「No.1」などと記載)¹)

先行きが見えない不安が、まずは生徒たちに押し寄せている。さらに、炭砦ならではの不安や不満も訴えられている。

ついていっても炭砦だったらまたこんなことにもなりえない。またこんなことになったら弟や母がかわいそうだ。だからもう炭砦にはいきたくない。(No.2)

弟妹たちは、せっかくこの学校になれたとたんに、また移らなければならなくなってしまう、弟妹たちは、いやがっています。てんてんと、学校を、転校するのはいやです。一所のところ、三年間を、おくりたいと、ねがっていましたがそれも、もう、遠くにいつてしまったような気がします。(No.2)

¹ 以下の作文では、誤字・脱字も含め、作文の原文をそのまま記載している。

父は、子供の頃、自分は、18 ぐらい学校を、変わったものだ。だから、おまえ達には、その苦しみを、^(ママ)味あわせたくないといった。私も出来れば転校なんてしたくなかった。でも閉山という問題の中で、自分勝手なことはいえない。(No.3)

閉山や労働条件の問題などから、炭鉱労働者の移動性が高いことはこれまでも指摘されてきた。1950年代に筑豊で調査を行った原俊之も、「炭鉱労務者の子弟に特に甚だしい頻繁な転校——これは父兄のはげしい移動によるものである——が、児童の学習に大きな不利益を招いている」(原 1954: 64)と指摘し、炭鉱労働者の頻繁な移動が、子どもたちの学習環境の悪化をもたらすことを指摘している。ここに掲げたなかでも、おそらく同じように産炭地に育った父親自身が「18 ぐらい、学校を変った」というように、産炭地に暮らす人々が移動を多数経験していることがうかがえる。そして、自分たちの家族にも閉山の影響が及ぶことで、弟・妹たちが転校をしなければならないことを「かわいそう」だと感じ、そのような状況を生み出す炭鉱閉山への不安や不満を表明している。

教師たちは、「炭鉱閉山という話しは、3 年ほど前にも言われていたのですが、先生方に、『絶対に閉山はしませんから安心してください。』という事を聞かされていたので、かなりのほほんと暮らしていたことは事実ですが、今、我々の身の上に振っておりとは思ってもいなかったもので、いささかあわてた事も事実です」(No.3)との指摘があるように、『絶対に閉山はしない』と子どもたちに伝えていたようである。それは、子どもたちを安心させるための物言いだったかもしれないし、「閉山しないでほしい」という教師自身の希望的観測であったのかもしれない。しかしいずれにしても、子どもたちは、教師の言葉とは反対の現実を突き付けられ、不安を募らせていた。

2.2 進路への影響

次にみられるのは、進路への影響である。

尺別炭鉱の閉山と言う問題がおきてぼくたちや父、母の不安を高めたこともあった。その中でぼくたち 3 年生はこれからどうしたらいいかなやみつづけた人もいると思う。高校へいけなくなった人もいた。……閉山という問題が日々に高まってきた時には、自分の進路をうしないかけたこともある。炭鉱閉山はぼくたち 3 年生にとっては大きな問題になったと思う。ある人は閉山で高校へいきたくてもいけないという状態で、その人の未来への希望をうばっていった。(No.1)

閉山がもう少し早ければ早く、おそければおそいと、自分の進路について、こんなに迷わないで決められたと思う。私の場合進学だが、自分の家がどこへ行くのかわからないために、「いちおう」ということで決めてしまった。だから、これからどうして良いのかわからない。(No.2)

今私たちは、高校受験でもう試験を受けました。しかし、その中で落ちた人はともかく、合格したもののなかでも、他の地について行くでしょう。(No.2)

閉山によって、新たな職を求め、一家の稼ぎ手は移動することになる。それに伴って、家族も移動する可能性が高い。しかし、すぐに移動先が決まるわけではない。しかも、3年生からみれば、卒業直前の3学期の2月に突然閉山が決まったことになる。そのようなタイミングで、これから先の進路を決めるといわれても不可能な状況にある。それまでの希望から高校進学を決め、その準備を進めていたが、結局進学がかなわない生徒も少なからず存在したことがうかがえる。

一方、「ぼくはちょうど三年がおわって閉山してよかったとおもっている。もし去年閉山していたらどこかにいっていたかもしれない」(No.2)との思いもつづられている。閉山が中学校生活の終わりという節目と重なったことで、かえって再スタートが切りやすいという状況もみられたようである。

また、勉強に専念するとの決意も語られている。

僕はこれから高校へ行こうと思うがまず合格することが先決問題だ。高校に入ったら別に心配することはないが……他の人は高校へ入っても親が移らなければならないので、多くの面で心配事が絶えないと思う。／僕の家は父が国鉄に務めているので他の人とはくらべものにならないくらい安心していられる。しかし炭鉱がつぶれた以上、尺別の駅も小さくなるだろう。(No.2、「／」は原文では改行、以下同様)

このように、まずは生徒としての本分として勉強に打ち込み、高校に合格するという決意も述べられている。ただし、この生徒には「父が国鉄に務めているので他の人とはくらべものにならないくらい安心していられる」という状況が、受験勉強に取り組める環境をつくり出していることが認識されている。閉山の直接の影響が及ぶ炭鉱労働者家庭の子どもたちの場合は、上述のように、合格してもその高校に進学できるかどうかもわからないという状況に置かれていた者が少なくなかったものと考えられる。「これから就職、進学の道を進もうという私たちにとって『閉山』ということは、とても重荷になります。／進学をめざしていた者が家庭の事情でやむなく進学をあきらめたり、今後のことが不安で、ノイローゼぎみになり、あらゆる面で生活が乱れて来たり……。／実際、そのようなことは、まだ、みたことも、耳にしたこともありません。しかしこれは、ありえることなのです」(No.2)とも語られるように、実際に進路への影響や、そのことがもたらす精神的な負担は、作文執筆の時点では具体的に生じていなかったとしても、そのような問題状況が訪れる可能性は非常に高いものと捉えられていたこともわかる。そのなかでは、「卒業と閉山よけいにかなししいけどもしかたがないや」(No.2)というある種の「諦念」もみられる。

2.3 家族との関係

親たちの閉山後の状況と生徒自身の進路によっては、家族が離れねばならないことにもなる。

ぼくは中学三年生だけれど卒業式がこないばいいと思う時もある。それはぼくが就職するからだ。ぼくは母父とわかれるのはいやだけれどぼくは中学校を卒業するのだ。(No.1)

また、親を含めた大人たちの状況に思いをいたらせる生徒も少なくない。

大人は職をうばわれ子供は友とわかれる。(No.2)

「閉山」この二文字のことばでいままでたのしくらしていたひとたちが、仕事がなくなりまた、新しい、はたらきばしょをみつけなければ生活して行けない、なんて恐ろしいことばではないでしょうか。(No.3)

家庭であっては、／やはり、父の就職の事、／万事、お金がかかるという事です。(No.1)

親たちが一瞬にして職を奪われ、そのことに伴い自分たちは友と離れなければならないという閉山の意味が、中学生たちに実感されていることがうかがえる。そのなかで、「ぼくたちはいつまでもあほうんと生活してはいけないと思うそれは親たちは閉山になって別の職業をさがしているのに子供がだらんとしてはいけないと思う」(No.2)との決意も述べられている。

2.4 教師への影響

閉山は、教師たちにも少なからず影響をもたらす。

もうそろそろ閉山になったのでこの尺別からでていく人がめだってくることだろう。そうなれば学校の人教が少なくなりまた学級でもおちつかず、毎日が不安なゆうつな毎日をおくっています。そのために生活がみだれてきています。気持がいらだってきげんが悪くなり人にやつあたりする人もいることだろう。それは生徒だけでなく先生がたにもありゆることだと思えます。(No.2)

生徒たちに落ち着かなさが見られるだけでなく、教師たちにも心理的な面での不安定な様子がみられていたことがわかる。

2.5 実感のなさ

これに対し、閉山といわれても実感がわからない、という率直な思いも綴られている。

そんな中で、私たちは受験をした。／普通なら閉山のあおりを受けて、しょんぼりと…。なんて考えそうだが、実際には、そんな様子も見られず、のんびりといやのんびりすぎたかもしれないが、そんな調子だった。(No.1)

今は退職金、その他の理由で尺別から去っていく人もいないので、ぜんぜん実感がわかない。／やがてみんなが山を去っていき、そして私もこのすみなれた尺別を去る時どんな気持ちになるのだろうか？
(No.3)

閉山といわれても、すぐに何かが変わるというわけでもなく、実感が持ちにくいこともうかがえる。

2.6 社会への問題意識

その反面、閉山をきっかけに、社会への問題意識を強くかきたてられた生徒も少なくない。

はたして閉山とゆうことで炭鉱の人だけがなやみくるしんでいるのでしょうか。それはぎもんですが、炭鉱の近くにいる人々や炭鉱で商店をしている人々はずっとこまるだろう。きゅうにきまった閉山は労働者をくるしめていることでしょう。こをゆうげんじょうで政府はなんもしてくれない。いくら閉山反対とわざわざ東京まで行ってきてもとかく政府はずずめがそのへんでないと思っているだけだろう。なんかせいさくをとってくれてもそれも閉山のあとのことだと思う。いくら赤字だらけだとゆっても国民は税金を政府にはらいつづけている。その税金も全部国民のためにつかわれているのだろうか。自えいたいのも、けんぼう 19 条(9 条——引用者)あたりに日本は軍じ力をもたないとかいてあるがその軍じ力が自えいたいとわかないだろうか。ひこうき一きつくるのにも何十億もかかる。そんなにひこうき一きい^(ママ)や二きつくるだけの金があれば少しでも閉山になりそうな炭鉱にまわしてくれてもよいのではないかと自分は思う。／自分はとにかくふまんだ。(No.2)

『閉山』、別にどうってことはない。なるものがなっただけである。文明が発達する上において、それをさまたげる者は消されるということ知っただけでも、人生経験大であろう。／閉山反対を叫びながら当選した議員も「やるだけのことはやりました……」とでもいいながら、次はなんの社会批判をしてやるかと考えていることであろう。……労働者とはこうまでも弱いものなののでしょうか？(No.2)

「炭鉱が一番暮しやすいんだ」と言っているおやじさんもいたが、これからの石炭企業はさびれて行くだけのように思える政権がうつらん限り。(No.3)

このように、閉山を通じて、特に為政者への強い問題意識を覚えるようになっていく。

一方で、そのことは、生徒たち自身の姿勢を反省的に捉え返す契機ともなっている。

学生生活も終るとなると、閉山は関係なく感じ、逆に義務教育が終わるということが、悲しいのであるからして、無責任の要^(ママ)でもある。また、この学校がなくなるということは、母校は、影になってしまうが、俺の心には、立っているだろう。しっかりと！なぜ母校がなくなる。閉山だからだ。石炭が取れなくなったからだ。なぜ、閉山までなったか、石炭がないからだ。国がえん助しないからだ。国は何をやっている

るのだ。なぜえんじょ^(ママ)おしなかつたのだ。(佐藤——引用者)栄作はどうした。なんだ！こうだ！これじゃまったくきりがないのであるからにして、真剣に考えなければならなくなる。無責任なやつはだれだ！つまり俺になってしまうのであるからにして、真剣に考えている。(No.3)

閉山についての私の考えることは、私達は閉山、閉山というばかりで、学校、学級で、少しもそんな話し合いみたいなものが、もたれなく、ただ口で言っているだけであった。／私達は、閉山に対して、もう少し、話しを持つべきだ^(ママ)と思う。中学生としての考え方、大人の人達に、まかせて、私達はなにもしなかつた。そりゃできないかもしれないけど。私達の話し合いによって、しっかりとした考えも、もてたと思う。私達の声、作文、など、政府の人^(ママ)に知しでもしてもらいたかつた。(No.3)

自分たちが真剣に考え、その考えを伝えていく努力をすべきだ^(ママ)ったことが述べられている。その延長として、「一九七〇年は色々な年だ。6月にひかえている安保のほか色々ある。私にとってもだいじな年だ」(No.1)、「われら若者は20世紀、いや21世紀、日本とゆう^(ママ)1つの大国になりつつ国をせおって前進、前進を毎日おこなわなくてはならない、もしか自分が労働者又は大学生となり^(ママ)1りの大人となった時は社会生活のかいぜん戦争反たい、とヘルメットにみをかため、デモを行なうかもしれない、そこには、デモがなぜ行なわなくてはならないかもく的をつかんでからおこないたい」(No.1)と、安保問題など他の社会的な問題とも関連させながら、デモなどの手段を使って問題の解決に取り組んでいくという決意も語られている。

このような社会に対する問題意識の高さについて、作文・手紙の閲覧を認めてくださった松実氏は、「平和を守り真実を貫く教育の確立」を教育目標の基本に掲げる尺中の校風と、その反映としての教師集団や生徒会活動・学級会活動のあり方などの総体によるものと思うと述べている²。一方、これに関連して、「1つの思想にかたまっている学校とも別れる」(No.1)と作文に書いた生徒もいた。つまり、当時の尺中の教師たちに、一定の思想的傾向を感じた生徒も存在するということである。

この一定の思想的傾向という点については、教員の組合活動との関連も考えられる。当時の背景を探れば、1969年度の日本教職員組合(日教組)の全体加入率は55.8%と教員全体の過半数となっており、組合に所属する教員が多数派だというのは全国的な傾向であった³。また、1970年代前半には、東京郊外で、革新勢力の伸長を支える保護者層の支持を受ける形で、「集団主義的」な学校・学級づくりが進められた状況もみられる(原 [2007]2010)。このような当時の状況をふまえれば、尺中の教師たちが際立って社会に対して批判的だったというわけではないだろう。ただし、現状に対して少なからず問題意識を抱えているという教師たちの意識が、ある生徒たちにとっては肯定的に、また別の生徒たちにとっては否定的に受け取られながら、大きな影響を与えていたことがうかがえる。

2.7 卒業式をめぐる意識

² 2016年4月29日に行った松実氏への電話でのヒアリングより。

³ 「日教組加入率・新規加入率の推移」(http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/jinji/_icsFiles/afieldfile/2015/04/07/1356493_02.pdf, 2016.4.17 取得)。

社会に対する問題意識を高める一方で、中学生として望ましい形で卒業を迎えたいという思いも語られている。

なんていってもぼくたちが尺別最後の卒業生になるのである以上、尺別一番目の卒業式のようにゆめをもって尺別での最後の卒業生になり、りっぱな卒業式にして尺別をさっていかなければならないという気がする。(No.1)

今はこの卒業式は不安ながらとくぎりのあるきちんとした卒業式をおくりたいと思う。(No.1)

閉山と共に向えた卒業式はぼくたちだけのものではなくこの学校、いや尺別炭砦の卒業式ではないだろうか、今はただこれからがとても不安であるし、この学校最後の卒業生として立派に卒業式やりたい。(No.1)

尺別炭砦の閉山により、尺中としても最後の卒業式になることが予想された(現実にもそうなった)。そのため、「りっぱな卒業式」にしたいという願いが表現されている。

ただし、閉山の騒動は、卒業式にも影響したようである。

今年は呼びかけの内容も例年と少し違うようだが、それも最後の卒業式ゆえにだろうか。(No.1)

去年はたしか、一週間くらい前から練習をしていたのに、今年は二日前からです。なぜこのようになったのかは知りません。又知ろうとも思いません。しかしただ一つだけ言えることは、この尺別炭砦が閉山したからだと思います。(No.1)

準備期間も内容も、これまでの卒業式とは異なった形で実施されたことがうかがえる。

そのなかで、卒業を新生活への希望への第一歩と位置づけようとする意識もみられる。

炭砦閉山の中でむかえる卒業式の暗い中にも、何か新しい希望があると僕は思う。(No.1)

さいわい今年卒業の私たちにとって、新しい生活との締めくくりの最大なチャンスということで、あるていど喜んでいきます。(No.2)

ぼくは(高校に——引用者)おちたら道外へ行くつもりだ。やはり道外へ行った方がいろいろなものといめんできるとおもうしおのれじしんをみがきあげることができると思う。そういうところでぼくはじぶんのじつりよくをためしたい。(No.3)

上述のように「諦念」をもって閉山の状況を受け止める者がいるなかで、希望を見出し、新しい生活に臨もうとする者もいる。

2.8 尺別への思い

そして、もう一点取り上げられるのが、尺別への思いである。まずは、地理的な面、あるいは活動内容・種類の面から「尺別の狭さ」が改めて捉えられている。

実にちっぽけ 実になか 山に囲まれ 私達の楽しむ場所もないへんびな所、尺別は頭の中をふるぼけさせ、いなか者にしてしまった。緑があるとか のびのびしているとか 人は言うけど 私はデパートがあつたり 音楽会に行けることのほうが 魅力がある。／しかし ここともおさらば、やはり閉山になってしまった。(中略)友達と別れることはやはりつらい、せつかくなれてきたのに……」(No.1)

私たちは今まで炭砦という狭いわくの中で暮らしていた。そういう意味から閉山は良い試練かもしれませんが。これからみんないろいろな方面へ出て活躍すると思いますが、今度おとなになったらみんなと会って昔の思い出話などしたいなあと思っています。(No.1)

このように「尺別の狭さ」を語りつつも、同時に友だちと別れることがつらい、あるいは友だちと大人になったら尺別について語り合いたいとも語られている。

同じように、平素は尺別にネガティブな思いを持ちつつ、いざ閉山を前にして、尺別への思いが高まっている様子は他の生徒によっても語られている。

私は、前に尺別がきらいでたまりませんでした。／尺別を出たいと思いました。しかし、今、閉山となり、遅くとも今年中に、尺別を出て行かなければなくなる、という状態になると、やはり 15 年間産まれ育った土地をはなれたくないと思うようになって来ました。／この炭砦が続き、前のように、復活することが本当に望ましい事です。(No.3)

私はいままで、私の郷里はこんなにいい所ですと、他の人に言うことはできなかった。でも、雄別も、尺別も閉山となり、この山からいなくなって他の所へ行くと考えた時、私はきっと私は雄別も尺別もとてもいい私の郷里であるとみんなにいえると思う。／尺別はなくなっても私の心にはっきりとすばらしいものとして残っている。そして、みんなの心の中にも残っていると思います。それが本当だと思います。(No.3)

いざ尺別から離れるとなると思いが強まるということもあろうが、閉山によって尺別と自分との結びつきを、改めて感じている様子がうかがえる。「私が以前住んでいた炭砦も閉山して、また第二の故郷である尺別が閉山するのは寂しい。／卒業して皆がバラク(繰返し記号——引用者)になっても、尺別という所がない限り

私たちは、離ればなれになった人たちと容易に会えないのだ」(No.3)というように、たとえ大人になってから再会しようとも、尺別という地域がなくなれば難しくなるだろうと予想されている。そしてこの時点でも、「尺別で生まれ育だった。にぎやかなところだった。しかし、もうそのようなことはなくなり暗いところになってしまう」(No.1)、「豊かで、明るく、うきうきしていた炭砦も、いよいよ1970年2月28日で、暗く寂しい炭砦になってしまった」(No.1)といったように、すでに寂しさを感じる様子も指摘されている。

3. 閉山決定直後の2年生の作文

3.1 別れのつらさ

続いて、閉山決定直後の2年生の作文をみてみたい。ここでまず浮かび上がってくるのは、別れのつらさである。

尺別は、もう何十年も続いている所だ。この尺別で生まれ育った人は、よけい、離れたくないだろう。私は、転校してきて10カ月ちょっとだった。父も何十年も炭砦に努めていた転校するたびに、「炭砦なんかやめちゃえばいいのに」。と思ったことがたびたびあった。「やめてたら、こんなにつらい思いをしなくてもよかったのに。」……………／みんなとも仲よくなれたのに。離れ離れになるなんて、なんて悲しいことなんだろう。もう一年、みんなと勉強できると思っていたのに。(No.4)

閉山と聞いて一番先に思った事は友との別れである。／これほど自分を苦しめ又不安にさせるものはない。(No.4)

3年生は進路選択と閉山が重なったために、不安も大きくなっていった。そのような3年生の姿を見て、「私は、まだ二年生だからいいな、三年生は大^(ママ)辺だ。三年生のことを考えるだけで閉山のいやなことを思い知らされる」(No.4)と3年生の状況に思いをいたらせる2年生もいる。ただし、3年生の場合、もう卒業も間近であり、同級生との別れはすぐに迫っていた。しかし、2年生の場合、まだあと1年は同級生たちと過ごせるはずが、閉山によって、友との別れが目前に繰り上げられてしまった。そのことのショックは大きかったと考えられる。

3.2 「ああよかった」

その一方で、尺別を去るということについて、気持ちを固めることができた生徒もいる。

「閉山ということをきいた時はただいやだこの尺別がなくなるなんて」と思いました。／だけど今としては、閉山が決まって四月か五月にはもう尺別を去らなければならないと思っただけで落ちてしまったように思います。(No.4)

また、閉山が決まったときの気持ちを、次のように表現した生徒もいた。

閉山が決まる前は、なんとなくそわそわして閉山したらどこへ行こうとかいろいろ思った。それにやっとなれた尺別からはなれたくないという気持ちが一時あった。しかしもうここはどうせ閉山なんだからというあきらめが心の中にかんできた、それからしばらくするとこんな田舎からはなれるというよろこびがかんできた。でもやっぱりさみしい感じがした。そのうちに東京へ問題をうったえるために約百人の人がいった。その結果もむなしく二月二十七日(金曜日)ついに全員かいこということがおこなわれた。そのときぼくは、ああよかったと思った。(No.4)

最後の「ああよかった」については、多様な解釈がありうるとされる。この点について松実氏からは、閉山問題で地域社会が揺れていたため、たとえ閉山決定という形であれ、問題に決着がついたことへの一つの感懐を示しているのではないかと解釈を示された⁴。

さらに、炭鉱閉山に伴う転校に対する複雑な思いも語られている。

僕はカコ何回も場所が送っているの^(ママ)でもうね感じないけれどやっぱり半面やだなと思う。でもうれしいときもあるそれは何回も場所が変っているいろいろな所がある。でも思い出はなに一つないそれだから炭鉱という所はやなんだ僕はそのいちばんいいだひょうだと思うだから少しでも閉山と言う言葉が出れば早くきまればいいと思う。(中略)僕はこの学校にきてまた半年ぐらしかこの学校^(ママ)えきていないでもやっぱり学校が変わるのはいちばんやだと思う(自分の考え)。(No.4)

短期間で転校をくり返しているために「思い出」はなく、閉山なら閉山と早く決まってほしいという思いと、しかし学校が変わらないで済むのであればそう願いたいという思いとが交錯している様子がうかがえる。

さらに、尺別への思いを吹っ切るかのように、次のように述べる生徒もいる。

僕が炭鉱閉山について思うことについてすなおに言えば 何とも思っていないということだ。／僕はこの尺別で生れ育ったが、ちっとも哀しいとは思わない思うことは早く向こうの町へ行ってなじみたい。／これだけである。／悩みは向こうの町と教か書が違っていたりしていないか。これ一つだけだ。むこうでどうなるかわからないが、今はとても気が楽だ。(No.4)

尺別炭鉱の閉山も、尺別を離れることも「哀しい」とは思わず、早く新しい土地に馴染みたいと述べている。しかし、こうした尺別を吹っ切る姿勢の強さは、逆にそれだけ尺別への思いが強いことを表現しているようにも感じられる。

⁴ 2015年8月30日に行った松実氏へのヒアリングより。

3.3 都市への不安

前項の最後に紹介した作文には、「悩みは向こうの町と教か書が違っていたりしていないか」と、転居先の状況に対する心配も載せられていた。単に転居するだけでなく、転居先がこれまで生活していた尺別よりも大きな「都市」である可能性が高いことが、生徒たちの不安をさらにかき立てることにもなっている。

いなかから都会へ出ると勉強の差もはげしい。都会の勉強について行くのには、夜てや^(ママ)をしてもついていけないのではないだろうかとみんなは言う。そしていなかものとばかにする人もいるのではないだろうか。そういうふあんの中で毎日をおくっている。(No.4)

私が一番ひっこして行ってしんばいなのは、学校の事。こことちがって町や都会は勉強がすすんでいるし、教科書や勉強のしかたも少しはちがうと思う。学校もここよりりっぱな所だとチョットふあんになってしまう。(No.4)

自分の事で思うっているのは、もし、東京あたりにいったとしたら、勉強の問題ですね。この尺別とちがって、とうきょうあたりでは、テストがたくさんある話です。勉強がだいぶちがうと思うので一番問題です。(No.4)

人生に一度や、二度の別れは、悲しいというより一歩、一歩、大人に向って行くのかもしれない。大人になるには、何度も別れがあるはずです。これくらいの別れでは、メソメソしてられません。知らない都会では、こういうことは、ぜんぜんうけつけてくれません。むしろ、それがあたりまえのようなへいぜんとした顔でいるのが、都会の本心だと思います。私のクラスの人も、都会へたびだつであろう。／でも、私たちは、まだ都会のおそろしさを知らない。私たちのこのせいじゅんな心を、にがらして行くのが、都会だと思う。(No.6)

家庭の中で父や母が閉山になってからの今後の生活を考えて、職を考えたりしています。けどどこも炭鉱のように賃金が高くありません。その中で炭鉱町にいるからこそ住たくのお金などもとられませんが都市に出ればそういきません。(No.4)

ここに掲げたように、その不安の大半は学習進度や程度の違いである。都市部の学校の方が学習のスピードが速くて、内容も高度であるとのイメージにより、「ついていけるだろうか」という不安を感じることになっている。その反面、不安を表に出さず「へいぜんとした顔でいるのが、都会の本心」だと、都市住民の心得を身につけようとする様子も見られる。

また、炭鉱の所得水準の高さと、生活費の低さを客観的に意識し、転居後は所得が下がり、生活費が上がることで生活が苦しくなることを予想する様子も見出される。さらに、再就職先の見通しもなかなか立たなかったようである。「私の前の希望としては雄別か、大平業炭^(ママ)鉱に行きたかった。でも雄別もいっしょにつ

ぶれて、大平業は、あともつても、2・3年くらいしかないという」(No.4)との指摘があるように、雄別三山の企業ぐるみ閉山は、近隣の、とりわけ太平洋炭礦の操業見通しにも影響を与えていたことが読み取れる。「今、家の状態はお客さんがたくさん来たり、まだ父が、出かけたりして、いつもあわただしい。やっぱりおちつかない」(No.6)といったように、親たちも再就職に向けて盛んに情報交換している状況も観察されている。

3.4 社会への問題意識

前節でみた3年生の場合と同様、2年生の作文にも、閉山を通じて社会への問題意識を高める様子が見られる。

いつも閉山のことで、仕事のない人々がこれからのいきさきと、仕事をいっしょうけんめいさがしている。たんごうのしごと、よりもつらいと思う。これからのいき先もさがさなければならぬと思う。こういうときにだんだん社会がはたつていくのかとぼくは思う。こういうくるしみ、たのしみがあつて。社会が発展していくのかまだ社会に生きるくるしみがわかっていない。しかしこのような閉山があつてほんとうに発展していくのかよくわからない。(No.4)

私は、はっきり言って、政府をにくみます。政府は今何を考へているのか。この尺別炭鉱に足を運んで来て、今考へていることを、私達尺別の家族の皆がいる前ではっきり言ってほしい。政府としては、いっこくも早く、炭鉱という炭鉱の山々を全部つぶし、石炭や豆炭をつかわせずに、外国から輸入している石油でくらさせるつもりだという事もよく、友達からは、くわしくいっています。この尺別がつぶれて政府の方では、喜んでる顔が目にかびます。テレビやラジオでは、炭鉱を、ぜったいにつぶすことはしないなどと、皆の前ではそう答へているが、いざ山がつぶれるという事になった時は、「私は何も知りませんよ」というような気持ちでそっぽを見ているのが一番にくたらしい気持がします。(No.4)

どこの炭鉱かわすれましたが(1967年に閉山した赤平・豊里炭鉱の話——引用者)、ある女の子が私たちの山をどうかつぶさないで下さいと佐藤(栄作——引用者)首相に手紙を書いたことがありました。そして佐藤首相はその少女にあつてつぶさないと約束したにもかかわらず何か月もしないでその炭鉱がつぶれたのです。この事は私は一生わすれないと思います。／佐藤首相がうそつきということ、その少女はきっと佐藤首相をうらんでいると思います。／こんなことは全体ない方がいいに決まっています。／だから尺別のこと、その少女のいったことなどを思い出してこんな問題が起つたら考へていかなければならないと思います。(No.4)

閉山によって苦しむ人々がいるということ、そのことが政府によって左右されていること、また政治家が口先だけでまったく対応しなかつたことなどへの憤りが表現されている。

3.5 閉山に対する複雑な想い

一方で、閉山によってもたらされる問題が大きいがゆえに、無責任に軽々しく閉山を話題にしてほしくないという意識も見られる。

皆が心配しているうえから、学校へ来てまでも閉山の話しをされたのでは腹がたつほどでした。

(No.4)

閉山、ということで一番いやだと思ったときははらが立った。それは、HR の時に、閉山ということについて班で話し合っ、はっぴょうすれといったときであった。それは、一度話し合わなければならないかもしれないもきゅうに、話し合えといわれたとき自分でもなんではらが立ったのかわからないくらいにはらが立った。(No.4)

炭鉱労働者家庭の子どもたちほどには影響を被らないはずの教師から、ただでさえ目をそむけたくなる閉山という現実に向き合えといわれることの腹立たしさなどが述べられている。

また、すべてを閉山のせいにしようとする雰囲気にも批判的なまなざしが向けられている。

閉山とはっきり決まるまでは、尺別はどうなるのだろうか閉山にならないでほしいなどと、色々心配した。尺別全体がおちつかない様子で、学校、家、どこでも閉山の話ばかりだった。でも閉山と決まってしまった今、みんなが話し心配していることは、新しい町、新しい学校のことだ。やはり今も不安な気持ちでいっぱいだ。でもぼくはその不安な気持ちを外面に出す必要はないと思っている。閉山になったから色々考えることはとうぜんでも、学校の生活にそれらは必要ない。とにかく今までどおり、あるいは今まで以上に充実した生活をして行きたい。と心の中で思っているが、実際に充実した生活をしているかというところでもない。だからといって閉山のことが影響しているわけでもない。授業中の態度が乱れていることで二年生全体で問題になっているが、このことも閉山が影響しているなどと理由^(ママ)づけしたくない。ぼくたちの問題をすべて閉山のせいだの一ことで終らせてしまう、それではあまりにも簡単すぎる。それにもっと他に理由があるはずだ。あと少しの期間に本当の理由を考える必要がある。

(No.6)

閉山はたしかに深刻な問題をもたらした。しかし、このころ、閉山とは本質的に無関係であるような問題まで、閉山を理由にどこか「仕方ない」と片づけられてしまう状況があったようだ。しかし、閉山とは関係のない問題については、自分たちで改めていくべきとの思いが語られている。

3.6 尺別に残る子どもたち

尺中の大半は尺別炭鉱の労働者家庭の子どもたちだが、もともと近隣に暮らしていた子どもたちもいた。

私たち原野やぎせんは、四月から音別の学校へ行くか、それとも、尺別の学校がなくなるまで尺別の学校にいるか、こまっている。大人の人の考えでは、尺別の学校がなくなるまで、尺別にいるのなら、一日一日と一人二人といなくなるなら、四月から音別の学校に入れた方がいいという考えです。私たち原野の生徒は音別へ行きたくないという人がいます。私もどうかんです。それは見しらぬ学校へ行くより、せめて尺炭の学校がなくなるまでみんなといっしょに勉強したいということです。でも、そんなある日音別から四月から音別の学校へ行くという手紙がきました。私たち、バスで通学する人たちは、音別へ行くことになりました。(No.4)⁵

尺別が閉山したら、尺別の人はいつかは、どこか他の地域にいつてしまうけれど、原野の人達は、牛などをかっているので、他の地域に行く人はすくないと思います。だから結局は、音別の学校へ行くことに、なってしまう。それも四月からだ。はじめは六月ごろ行くといっていたが、はんばから行くより、はじめからの方がいいし、尺別の学校にいたって、次々とやめていく人がいて、おちついて勉強ができないなどといって、四月になったそうです。私は、四月からなんて行きたくない。六月からでもいい。はんばからでもいい。おちついて勉強ができなくてもいい。できるだけ、長くこの学校に残っている人だけでもいいから、いっしょに勉強したい。音別の学校へいって、しらない人といっしょに勉強するより、残っている人だけで、勉強がしたい。音別へなんかいきたくない。この学校がなくなるまで、この学校ですごしたいと思います。(No.6)

尺別原野や尺別岐線などの子どもたちは、尺別炭砒が閉山して、尺中が閉校することになっても、尺別で暮らし続ける。尺中が閉校した後は、もっとも近いのが音別の中学校になる。そのため、尺中の生徒が大幅に減少する1970年3月⁶をもって尺中から音別の中学校に転向し、音別で新年度を迎えることになった。

4 閉山決定直後の1年生の作文

1年生の作文は、1969年度の修了式の3日前に書かれている。ここでは、ほとんどの生徒が、「閉山は嫌だ」という思いが綴られている。

私は、一年の思い出の文集のへん集委員になって、作文、詩などを、ひと通りよんでみると、どれもこれもみんな、「閉山になったらいやだ」という意見ばかりです。／それは、学級新聞を、見ても、なく、私のなやみのらんをみると、それは、みんな「閉山になったら友達ができるか」、「閉山になったらみんな

⁵ 冒頭にある「ぎせん」とは「岐線」のことで、尺別駅で根室本線と尺別炭砒鉄道とが分岐する地域一体を指す地名である(2016年4月24日に行った松実寛氏への電話でのヒアリングより)。また、「原野」も同様に地名である。

⁶ 1969年度には約350人いた生徒は、1970年4月に230人、同年5月に64人、7月には24人へ減少し、閉校を迎えた(嶋崎・笠原 2016: 11)。

とわかるのはいやだ」、みんな、閉山のことについて、真げんに、自分のなやみにとりくんで、がんばっている。(No.7)

閉山で友だちと別れるのはつらいが、何とか現実を受け止めようとしている。そのなかでは、「閉山になったって、だれかかにか、近くにいるという、あまい考えで、友達に『どこへ行くの』と聞くと、みんな行く所はちがう」(No.7)というように、もしかしたら近くに移れるかもしれないという淡い希望もなかなかかなえられない。そのため、「このごろは、だいぶんおちついてきて、友達などと、じょうだんなどをいってわらうこともあったり、しゅくだいなどもいやになることもある。でもほとんどしゅくだいはやっていない。さいきんは、そんなことは考えずに、閉山になるずっと前のような毎日が続いている。閉山のことあまり考えないようにしようと思う」(No.7)というように、閉山という現実とは距離を置こうという姿勢も見られる。

また、子どもたちなりの悩みも深い。

私はまだ尺別がほんとうにへいざんしたのかまだ、実感がわいてこないのに、父さん達は、^(ママ)就安について、いろいろ考えているが、私はいったいなにをして、なにをかながえればいいのか、かながえようとすると頭の中では尺別閉山のことばかり。大人たちはきっこうふうにいかにちがいない。「おまえ達はいっしょうけんめいべんきょうすればいい」というだろう。でも私達の立場になってみなければそうかんたんにはいかない。(No.7)

中学校1年生の経験や知識だけでは、閉山の現実を納得できるように受け止めるのは難しい。

一方で、尺別にとどまる子どもたちにも、やはり厳しい現実が訪れる。

私は、尺別中学校を、あと二年ほどで、卒業するまで、いてほしい、でも、それよりも、ずっと、そのまま尺別が、あってほしいと思います。／閉山が、あるために、私達、原野の人達は、音別の、学校にいかなければ、なりません。／私は、音別の、学校は、どんなのか、わかりませんが、でも今まで、いた、尺別の学校が、すみやすく、友達と、別れなくても、良いし、先生たちにも、一年間でも、ほとんどの、先生方もなれました。やはり、みんなにもなれ、友達にも、先生方も、なれましたから、やはり、尺別の、学校に、ずっといたいなと思います。(No.7)

1年を過ごして、中学校生活も慣れたところでの閉山は、子どもたちの中学校生活の見通しを暗いものとしたことがうかがえる。

5 4月以降の作文と推測されるもの

1970年4月以降に書かれたと推測される作文からは、注6で指摘したように、230人から4か月で24人へと10分の1に生徒数が減少していくという状況のなかで、残された者たちの苦しさが表現されている。

一人ずつへっていく中で、どうやって、勉強してゆけばいいのか、そらや、先生にしては、教えやすいかも知れないけど、でも、やっぱり、悲しいことだと思う、なんだか、勉強する時、きんちょうして、あつた時、もじもじしてしまう時がある。そんな時、はずかしいし、それに、目をつけられているみたいで、ちょっとしたことですぐ、注意されるし、とてもいやだ。(No.5)

体育だって、人数が少ないから、バレーも、3対3、ぜんぜん、続かなくて、おもしろくない、リレーの時は、人数のせいで、すぐ番が、まわってきて、つかれるだけつかれて、なんも、身につかない。(No.5)

少人数の学級では教師の目も届きやすいし、体育などの集団での活動は十分にできないということで、子どもたちは不全感を覚えている様子がみられる。そのなかでは、「まず最初に思うことは、／今度行く あつちの学校がどんなか……／・勉強はきびしいだろうか、／・どのくらい進んでいるか、／・テストの様子はどんなか、／・どんな人達だろうか、／・髪はどんなか、他に色々ある。／どうせ行くのが決まっているのなら、さっさと行ってしまいたい。そうしないと勉強も思う様にいかないし、高校入試にもひっかかって来ると思う」(No.5)と語られるように、いざ残される者の方が少なくなってくれば、少人数でいることや、移動に出遅れていることへの不安などから「さっさと行ってしまいたい」という気持ちも高まっている。

これに対し、「尺別が、観光地になれば、みんな、帰^(ママ)えつて来るのに、温せん、わいてこないかな、そして、みんな、仲良くくらしたい」(No.5)と、尺別が観光地化することで、また人が暮らせるようになることを願う様子もみられる。この生徒の願いとは異なるのかもしれないが、観光で産炭地の再生を目指すという発想は、実際に多くの政治家が用いた手法と同様である。

6 閉校 2 週間前の 3 年生の作文

作文の最後として、1970年7月に3年生(閉山決定直後の2年生)が書いたものを紹介する。2学期から音別の中学校に移ることが決まったが、期待よりは不安が大きいようである。

音中(音別中学校——引用者)ってどんな学校かな?先生はきびしいかな?数学は進んでいるんだろうか。とか早く行きたいなあとは前は思っていたけどいざ七月二十日に廃校になると聞いたら、行くのが嫌になってしまった。こんないい学校は二つとない。音中の人々が尺別にくればいいのかと、おかしなことを考えてたりした。(No.8)

私は、不安になる、三年生という、立場の中で、わたしはどうしたらいいのだろう。／八か月後、高校入試の試験があるというのに……／今となっては、今年の3月で、閉校になったほうが、良かったと私は思うのである。(No.8)

閉校前は少しでも長く尺中にいたいという気持ちがあったが、いざ閉校が決まれば、むしろ早めに閉校してくれていた方がよかったとの思いも聞かれる。矛盾しているように映るかもしれないが、生徒たちの心理としては当然のことと捉えられる。ただし、そのなかでも、「早く音別へ行った方が良いと思うがやっぱり、知らない人や学校を考えると行きたくなくなるこの学校も、もう廃校だと思つとやっぱりさびしい。でも音別の学校は近いしそれに同じ友達も行くのだからまだしあわせだと思つ」(No.8)ということも書かれているように、残された生徒がまとまって音別に移ることになったのはまだ救われた状況だとの思いも持たれている。

尺中の閉校によって、自身に思い出を与えてくれた場がなくなることへの感慨を述べる者もいる。

ぼくのばあいだと、一年から、三年までのあいだに。いろいろな楽しかったことが、思い出されます。しかし。少人数でも楽しかった、日もあるが、だいたい日は、悲しい日でした。勉強といっても、あまりする気もおこらずなんとなく、その日を、くらしている。この廃校という日も、いつかくると思つていたが、いがないに早くきました。この学校がなくなるということは。ぼくたちが、ちいさなときから。かよつた。しょうがつこもなくなつてしまうということです。思い出のある物は、つぎつぎと、なくなつてしまうような気がします。(No.8)

しかし、閉校を前にしても、どのように振る舞えばよいのかわからないというのが、多くの生徒の抱えていた思いだったとも捉えられる。

『のこり少ない尺中生活を無為にすごすのではなく、有意義にすごす』ということは、私にとってはむずかしい。／有意義にすごすには、どうすればよいかと考えるだけでもむずかしい。／そういうことを考え答えがわからぬまま今日もおわつてしまう。(No.8)

そして尺中は、24期生にあたる3年生、25期生にあたる2年生、26期生にあたる1年生を音別中学校に送り出し、1970年7月20日、閉校することとなった。

7 転居先からの手紙

7.1 尺別とは違つた良さ

最後に、尺中を離れた生徒たちが、松実氏に送つてきた手紙をみてみたい。尺中の閉校記念誌によれば、尺中を離れた生徒たちの転出先を1970年7月時点で判明していた269名についてみると、北海道内が115名(42.8%)、神奈川が48名(17.8%)、千葉が32名(11.9%)、愛知が16名(5.9%)、埼玉が14名(5.2%)、静岡が13名(4.8%)、東京が7名(2.6%)、三重が5名(1.9%)、栃木・岐阜・広島が4名ずつ(1.5%)、茨城が3名(1.1%)、宮城が2名(0.7%)、滋賀・山口が1名ずつ(0.4%)となっている(尺別炭砦中学校 1970: 25)。

このような生徒たちの手紙からは、まず、転居先にも良さを見つけ、馴染んでいる様子が見られる。

学校の様子は、まず一番びっくりしたことは、男女がものすごく仲が良いことでした。／担任の先生は〇〇先生と言ってもものすごく親切な先生です。勉強の面はぜんぜん違います。／教科書はぜんぜん違ってただ同じだったのは、英語と美術だけでした。／こちらの勉強の仕方は、先生があてていかないで、自分で進んでなんでも答えます。／こちらの人は、はきはきしていて、こそこそいわないで、すぐその場でなんでも言います。／この点は尺別と違っていると思います。(道外、〇〇は本文では実名)

男女の仲のよさや、授業への積極的な態度などを肯定的に評価している。また、「尺別は、やさしすぎると思います。そのために、他の学校へ行くと苦勞すると思います」(釧路市)と語られているように、尺中が「やさしすぎ」、厳しさが足りなかったという思いを抱く生徒もみられる。

7.2 尺別・尺中の魅力の再発見

しかし、やはり尺別や尺中の魅力を再発見したという指摘は数多い。

今ほど尺別がいい所だったなと思うことはありません。／静かで、空気もきれい、学校は小さくて、ぼろかったけど、友達もみんな良い人、ばかりだったし、この日本の中で、尺別のような良いところはないと思います。／それが、今まではそんなことに^(ママ)気づかず、閉山になるなら、早く閉山になっちゃえばいいと思った自分が今すごくいやな気がします。(道内)

尺別にいたころには気づかなかった魅力に、尺別を離れることで気づいた様子がうかがえる。

学校内の様子についても、深く観察している姿がみられる。

私がこちらにきて特に感じるのは、尺別ではストーブがみんなの交流のもとになっていたということだ。学校では、それぞれ数人のグループをつくってほとんどその中で行動しているのだ。みていて、何か尺別とちがうような気がした。それぞれグループもあったがでもみんなもっとたくさんの人と話していたような気がした。それではどこで話していたかと考えるとストーブなのだ。みんな(特に女子)は寒くても寒くなくてもストーブのまわりにあつまっているいろいろな話をしていた。それが楽しみだった。だから考えてみれば、冬の方がたくさんの人と話したような気もする。尺別にはストーブのような、みんながあつまるところがあったがここにはそういうものがないから数人のグループだけにかたまってしまうのだ。(冬になったらつけるとはいっていたが)そのせいか、班はあるのだがぜんぜんまとまっていない。(道外)

小学生がバスで遠足に行くのを見て私がおどろいたら、こちらの人は、それじゃ、どうやって遠足に行くの?とって、おどろいた。この辺の人は遠足はバスでいく^(ママ)もで、歩いていくものではないと思っ

ているらしい。そしてたくさんお金をかけて、観光地のようなところにこづかいをもっていくそうだ。尺別でいえば日帰りの修学旅行かなにかみたいだ。それをきいて、私はこの人たちがなんとなくかわいそうな感じがしてきた。ここだってまだ自然はたくさんあるのだから少し歩けばいくらでも、おもしろいところが見つかるはずだ。(道外)

ストーブは寒冷地ならではのものであるが、「島宇宙」(宮台 [1994]2006)と称されるような小グループに分断されがちな中学生の人間関係を、そのストーブが包摂する機能を果たしていたことがうかがえる。また、遠足についても、あまりに当たり前になっていて教師も生徒も気づかないような「おかしき」に気づき、身近にある有益な教育資源を活用する視点が提示されている。

また、生徒会活動に触れて、次のようなことも著されている。

生徒会活動はパットしません。／こんな事がありました。／私が越して来てから少し後です。／生徒会、予算の事で集会をしたんです。／内容は、予算の事だけで、話しに聞くと／予算集会が年二～三回集まれるだけ／だと言うんです。／尺中のように行事も、話し合いの場をもたず代表者まかせです。／でも、〇〇〇中学校にも立派な意見を／もっている人もいたんです。／予算会議が終わり、解散しようとした時、／二、三人の三年生から「もっと話し合いの／場を作ろう」という呼びかけが出たんです。／私ももちろん賛成でした。／すると、生徒会長は何ん^(ママ)と言ったと思います。／『今は、民主主義の時代だ。社会でも勉強し／ているとおりに、代議制をとっている。／生徒会もこのあり方でいいと思う。』と／言うんですよ。会長は感情を表わし／けんかごしに言うんです。／先生も会長の意見に賛成していました。／こんな中学校なんですよ。／こんなことがあってからです。尺中生徒会が／どんなに生徒の意見を尊重しているか／知ったのは。(生徒会は生徒全員の会だもの)／〇〇〇中学校では団結にかけているんです。／担任の先生も言っていました。／『「炭鉱は、お父さんたちの仕事は決まっているし／子供達の団結力もある。／〇〇〇中学校の生徒達の場合は、お父／さんの仕事も違うし、生徒ひとりひとり／の環境も違う。だから考え方も違って来るん／だよ』って。／だから気心の知れた親友どおしはいないん／だそうです。／学級も意見がぶつかるけんかごしですよ。／私はどうしたらいいのかわかりません。／私はこんなに弱いなんて思ってませんでした。／でも、今では、一人じゃ何ん^(ママ)にもできないことが／わかったんです。／尺別にいたころは友達もたくさんいました。／そりゃあ、私はなんでも言っちゃう方だった／からきらわれた事もあるでしょう。／でも気に入らないと思われても平気だつ／たんですよ。／ところが今ではきらわれるのがいやなんです。／だから今の私は、学級会の時、自分の意見／を主張するのがいやなんです。／なんて弱いんだろうと自分がいやになります。／広い、知らないところに、一人でいるみたいにさえ思えます。(道外、〇〇〇は原文では実名)

「代議制民主主義」をとっているがゆえに、集会での発言を制する生徒会長、炭鉱とは違って親の職業も違い、団結力もないから考え方も多様で、わかりあうのは難しいと語る教師の姿に、尺中の元生徒はショックを受ける。そして、これまで自分が自由に意見を表明できたのは、尺中では生徒同士の信頼関係が強固

であったがゆえであることに気づく。そのような信頼関係が築かれていないなかで、尺中とは異なる環境に置かれたことを改めて認識し、「一人でいるみたい」と感じるようになっている。

7.3 閉山と無縁の日本社会

また、転居先では、自分たちが尺別で直面した閉山という重たい現実が、まったく共有されていないことにも気づかされることになった。

閉山したから、私が仙台に引っ越してきたのだと言っても、友達は何^(ママ)んだか、納得のいかない顔をしていました。そういう時、ちょっと、さびしい感じがしました。(道外)

日本に住んでいながら閉山という／言葉がわからない人もいますよ。／私が学校へ行ってもないころ。女子の一人／と話していたら、その子が『閉山てなに』って／言ったんです。私は泣きながら炭鉱から／来たのに閉山という言葉さえ知らない人が／いるかを思うと何て言ってもいいのかわかりません／でした。／ベトナム戦争、公害などとさわいでいても／『閉山なんて』と言うんでしょうか。／すごく悲しかったです。／いくら頭が良くても軽べつします。(道外)

自分たちが不安と悲しみを抱えながら閉山を経験し、転校してきたのにもかかわらず、移った先では「閉山」や、そもそも「炭鉱」自体が「過去」のものであるかのように扱われ、少なくとも大半の中学生にとっては関心を持たれる事柄にはなっていなかった。そのように、産炭地のことを「忘却」しているかのような本州の現状を前にして、悲しみや怒りを感じている様子がわかる。あるいは、産炭地以外では、炭鉱にはほとんど関心を持たれないような状況だからこそ、「容易に」尺別炭鉱も閉山させられてしまった現実を突きつけられたとも捉えられる。

まとめ

蛇足ながら、最後にこれまでの作文・手紙の紹介から明らかになったことを簡単にまとめておきたい。

第1に、尺別炭鉱の閉山は、当然ながら多くの中学生に不安と悲しみをもたらしていた。特に3年生にとっては、高校受験を直前に控えた時期でもあり、家族の再就職の状況によっては希望する進路がかなえられないケースも見出された。一方で、1・2年生は、突然に尺中での生活を寸断されることで同級生と離れなければならない悲しみや、転校先での生活の不安を覚えることになっていた。

第2に、尺中に残された子どもたちにも、戸惑いや心理的な負担を生じるようになっていた。閉山によっても移動する可能性の低い尺別原野や尺別岐線などの子どもたちは、早々に音別の中学校に移動することとなり、尺別を離れないのに友だちとの別離を経験させられていた。また、1970年4月以降も残った子どもたちは、4月から7月にかけて生徒数230人が24人へと激減する環境のなかで、教師の視線をより強く意識させられ、集団的な教育活動も乏しくなるなど、学校生活での負担を感じるようになっていた。また、閉校

時に残った子どもたちは結局音別の中学校に移ることになり、年度の途中での転校となった。家族の再就職の問題など、子どもたちにはどうすることもできない条件の不安定さにより、子どもたちの学校生活・学習環境も著しく不安定なものとなっていた。

そのようななか、第3に、閉山に伴う不安や負担をもたらす社会に対する問題意識を強める生徒もいた。この点は、前述の「平和を守り真実を貫く教育の確立」という教育目標を持つ尺中の状況を一定程度反映していることも考えられる。その一方で、閉山という大人でも容易には受け入れがたい現実を前にして、自分の持てる知識と経験で自分なりの理解枠組みをつくり上げ、そのなかで社会における問題状況をつかみ取ろうとする姿勢が強く感じられた。

そして第4に、このような問題意識は、尺中を離れた後にも再び認識されることになっていた。特に、転居先での閉山に対するあまりの無関心ぶりに、悲しみや怒りを感じつつ、このような産炭地以外での無関心さが、容易に閉山のプロセスを推し進めさせたことに気づくことにもなったと考えられる。自分たちが経験した悲しい出来事が共有されないというつらさは、震災等の被災地から避難した人々も少なからず経験していることだとも思われる。

それでは、この多感な時期に経験した閉山という出来事は、その後のライフコースにおいてどのような意味を持つことになったのだろうか。この点については、作文・手紙を複数残している元生徒が取り上げている内容の変遷をたどる作業とともに、尺中の元生徒たちへの追跡調査を進めるなかで、明らかにしていきたい。

【謝辞】

尺別炭砦閉山時の尺中生の作文・手紙という大変貴重な資料を整理・保管され、これらを快くご提供くださった松実寛氏に、改めて感謝申し上げたい。また、松実氏との間をつないでくださった石川孝織氏（釧路市立博物館）にも、心よりお礼申し上げます。

【文献】

原武史, 2007, 『滝山コミュニケーション 1974』講談社。（再録: 2010, 『滝山コミュニケーション 1974』講談社。）

原俊之, 1954, 「北九州炭鉱地帯小学校における教育調査の一断面——特に児童の頻繁な転出入の実態に関する考察を中心として」『九州大学教育学部紀要』2: 63-73.

記念誌編集委員会編, 2000, 『尺別炭砦中学校閉校 30 周年記念誌「あこがれ」』.

正岡寛司・藤見純子・嶋崎尚子・澤口恵一編, 1998-2007, 『炭鉱労働者の閉山離職とキャリアの再形成』I～X, 早稲田大学文学部社会学研究室.

宮台真司, 1994, 『制服少女たちの選択』講談社。（再録: 2006, 『制服少女たちの選択——After 10 Years』朝日新聞社。）

西城戸誠・久保ともえ・大國充彦・井上博登, 2015, 「太平洋炭鉱主婦会の記録——北海道炭鉱主婦協議会の会長の聞き取りと資料を中心に」JAFCOF 釧路研究会リサーチ・ペーパーvol.5.

尺別炭砦中学校編, 1970, 『地底の灯——尺別炭砦中学校閉校記念誌』.

芝竹夫編, 1968, 『炭鉱の子等の小さな胸は燃えている』文理書院.

嶋崎尚子・笠原良太, 2016, 「尺別炭砦の閉山と子どもたち——元尺別炭砦中学校教頭松実寛氏による講演の記録」
JAFCOF 釧路研究会リサーチ・ペーパーvol.7.

嶋崎尚子・須藤直子, 2013, 「『最後のヤマ』閉山離職者の再就職過程——太平洋炭礦と釧路地域」『地域社会学会
年報』25: 109-25.

新藤慶, 2015, 「産炭地における子どもの姿と教育実践——1950年代～1960年代前半の研究をもとにして」『群馬大
学教育実践研究』32: 123-34.

須藤直子, 2012, 「『ヤマに生きた人』調査分析(1)——調査概要と基礎集計」JAFCOF 釧路研究会リサーチ・ペーパ
ーvol.1.

———, 2015, 「『ヤマに生きた人』調査分析(2)——太平洋炭礦閉山離職者の再就職過程」JAFCOF 釧路研究会
リサーチ・ペーパーvol.6.

「炭鉱の子どもの作文」編集委員会編, 1986, 『どうして たんこうを つぶすんですか。』生活社.



炭鉱閉山がもたらす子どもの生活と意識の変容
尺別炭鉱閉山前後の中学生の作文・手紙を通して

(JAFCOF 釧路研究会リサーチ・ペーパーvol.9)



発行日:2016年4月30日



著者:新藤 慶

発行者:産炭地研究会(JAFCOF)

<http://c-faculty.chuo-u.ac.jp/~nakazawa/>



本報告書は、2016～2018 年度日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究 C)『第4次石炭政策下での閉山離職者家族のライフコース: 釧路炭田史再編にむけた追跡研究』(課題番号・16K04111 研究代表者・嶋崎尚子)による研究成果の一部である。